

父 「おまえに言われんでも、そんなことくらい知っとるわ。けどな、自由やいうて、何をしてもええわけやないやろ。さおり、おまえ、まさか友だちの悪口とか書いとんちゃうやろな。」

娘 「えっ…。そんなん…そんなん書くわけないやろ。」

さおりはこまった顔で答えました。

母 「さおり、携帯電話やインターネットは、その使い方をまちがえたら、だれかをとっても傷つけてしまうことだってあるんよ。自分の知らないところで自分の悪口が飛び交う。考えただけでもぞっとするわ。おもしろ半分です書いたメールの内容がエスカレートして、いじめにつながることもあってあるんよ。」

祖母 「ほう。携帯電話は、便利やって聞いてたけど、こわいもんなんやな。」

娘 「ごめんなさい。メールの中で、わたし、ちょこっとだけみほちゃんの悪口書いてしもた。」

父 「何！何でそんなこと書いたんや。」

とお父さんは立ち上がって、さおりにどなりました。

娘 「それは…。みほちゃんが、いつもわたしにえらそうに言うから…。ちょっとむしゃくしゃして…。つい…。」

父 「たとえどんな理由があっても、やっていいことと悪いことがあるやろ。そんなことくらい、おまえ分かんのか。」

母 「お父さん、最近メールやインターネットを使ったいじめが問題になってるけど、その子どもだけの責任やのうて、大人にも責任があるんやない。子どもが何でも話せる大人が周りにおったら、こんなこと起こらんとするけどな。」

うつむいていたさおりは頭を上げて、

娘 「うん。わたし、明日みほちゃんに全部話して謝^{あやま}ってみる。許してくれるかどうか分かんけど、許してくれるまで謝^{あやま}ってみるわ。」

今までの様子を聞いていたおじいちゃんが、

祖父 「さおり、『情報』っていう漢字を知っとうか。わたしは思うんじゃが、『情報』は『情けに報^ないる』と書くやろ。電話や手紙、それから、わたしはメールやインターネットはよう分かんが、そういうものは、本当は心と心をつなぐかけ橋にならなあかんのとちがうやろか。」

さおりは、大きくうなずきました。

祖父 「それじゃ、もう夜もおそくなったから、わたしはねるぞ…。」

と言って自分の部屋へ行きました。

弟 「さすがおじいちゃん、ええこと言うわ。よう覚えとくわ。」



情報化社会、何を大切に？

仲のよさで近所でも評判の福田さん一家のある日の出来事です。

お父さんが仕事から帰ってきたとき、居間のテーブルの上に置いてある娘さおりの携帯電話の着信音が鳴りました。

父 「ああ、またこんな所にケータイを置きっぱなしにして…。」

お父さんが携帯電話を開け、中を見ようとすると、さおりがとんできて、お父さんから携帯電話を取り上げました。

娘 「ちょっと、お父さん。何やってんのよ。私のケータイ勝手に見んといてよ。」

父 「何言うとなや。おまえがこんな所に置きっぱなしにしてるからやないか。」

そこへお母さんや弟、おばあちゃん、おじいちゃんがやってきました。

母 「どうしたん、二人とも大声出して。」

娘 「お父さんがわたしのケータイ、勝手に見ようとしたんやで。」

弟 「そら、あかんわ。そういうのを『プライバシーのしん害』って言うんやで。お父さん、よう覚えときや。」

父 「何をえらそうに。父親が娘のこと知って何が悪いんや。」

とお父さんがおこった声で言うと、お母さんがこう言いました。

母 「まあまあ、お父さん、そんなにどならんでも…。それにしてもさおり、最近、メールしすぎやない。」

祖母 「メール？メールって何や？」

弟 「メールっていうのは、携帯電話を使った手紙のやり取りみたいなもんやな。おばあちゃん、よう覚えときや。」

祖母 「さおりちゃんは、そのメールとやらで、だれとどんなお話をしてるんかの？」

娘 「別に…。友だちと、学校の話とか勉強の話をしているだけや。」

するとお父さんがまたおこった声で、

父 「その内容が問題や。メールやからって、何でもかんでも書いていいもんやないんやで。」

娘 「何でもかんでもって、何書こうとわたしの自由やろ。」

弟 「そうやで。この国には『表現の自由』っていうのがあるんや。お父さん、よう覚えときや。」

